

ジョジョの奇妙な冒険×とある科学の超電磁砲

アッシュクフォルダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通りですが、

何かいい題名があったら、コメントください！

ジョナサン ジョセフ 承太郎

仗助 ジョルノ 徐倫が

学園都市で御坂美琴達と出会い

それぞれのジョジョの

もう一つの冒険物語を書く予定です！

第一部 幻想御手（レベルアップ）

武装無能力者集団（スキルアウト）編

ジョナサン・スピードワゴンが登場

第二部 乱雑開放（ポルターガイスト）編

ジョセフ・シーザーが登場

第三部 妹達（シスターズ）編

承太郎が登場

第四部 革命未明（サイレントパーティー）編

仗助が登場

第五部 大覇星祭（だいはせいさい）編

ジョルノ・ミスタ・ナランチャが登場

第六部 天賦夢路（ドリームランカー）編

徐倫・エンポリオが登場

以下の六部構成になります。

目次

幻想御手（レベルアップ） 武装無能力者集団（スキルアウト）編	
第一部 第一話 東洋の都市国家 学園都市	1
第一部 第二話 強盗犯を倒せ！	4
第一部 第三話 仲間たちとの出会い	8
第一部 第四話 にわかジャツジメント 前編	10
第一部 第五話 にわかジャツジメント 後編	15
第一部 第六話 グラビトン事件	18
第一部 第七話 サイレント・マジヨリテイー	21
第一部 第八話 対決！ 一万の頭脳！	25
第一部 第九話 一对二の戦い！	29
第一部 第十話 取り戻すための戦い	35
第一部 第十一話 スキルアウト	40
乱雑開放（ポルターガイスト）編	
第二部 第一話 学園都市のジョジョ	48
第二部 第二話 一緒にデート	53
第二部 第三話 ポルターガイスト	57
第二部 第四話 声	61
第二部 第五話 最終決戦	65
第二部 第六話 命を懸けた戦い	71
第二部 第七話 ヒーローたちの生還	78
妹達（シスターズ）編	
第三部 第一話 白井黒子と空条承太郎	82
第三部 第二話 承太郎の保護観察の一日	85

幻想御手（レベルアップ） 武装無能力者集団（ス
キルアウト）編

第一部 第一話 東洋の都市国家 学園都市

デイトを倒してから、数日後

スピードワゴンのテーブルの上に便せんが置かれていた
裏返しにした時、俺は気が付いた。

差出人は「ジヨナサン・ジョースター」

急いで封を切って中を開ける。そこには手紙が入っていたのだ。

スピードワゴンへ

デイトとの戦いが終わって

数日が経ったが君はどうしているだろうか。

君に伝えたいことがあったんだけど

会う時間も無かった上に

どうしても恥ずかしくなりそうだから

手紙に書いておくことにした。

初めて君と会った時、

君は僕の事を紳士だと言ってくれたね。

本当のことを言うと

僕は子供の頃から父さんに勉強は出来ない

作法は成ってない、

お前は紳士失格だって言われ続けてたんだ。

大きくなってから

そんなことは無くなったけど。

心のどこかでは「僕は本当に紳士なのか」

って疑問に思うことがあったんだ。

そんな僕を君は紳士と言った。自分に自信が持てた。

紳士って誰かに認められてなる者じゃない。

でも、実は嬉しかった。

僕の目指している「本当の紳士」
に近づけたような気がしたんだ。
自分でそのことに気が付いたら
なんだが恥ずかしくて君と喋りずらかったんだ。
それから君は付いてきてくれた。
君を見ていると自分も頑張らなくいって思えた。
僕への敬意だけであんな危険な戦いに参加するなんて
君は本当に心の強い人間なんだ。君はいつか必ず成功するよ。
その心の強さがあれば。

最後に

こんな僕に付いてきてくれて本当にありがとう。
そしてこれからもよろしく頼む。
ジョナサン・ジョースターより

俺とジョースターさんは
ツエペリの旦那の遺書を頼りに
各地の放浪の旅に出た
そして、ツエペリの旦那の遺書を
俺とジョースターさんが、ちらつと見た所
石仮面が東洋の都市国家
学園都市にあると、判明した。

こうして、俺とジョースターさんは
長い船旅を得て
学園都市に、やって来るのだった：
ジョナサン

「ここ」が、東洋の都市国家 学園都市」
スピードワゴン「長い船旅だったな、ここが学園都市」
ジョナサン「初めて、東洋の国に訪れたが

僕たちの知っている、東洋の国とは、まるで違うな」
スピードワゴン

「俺も世界各国 放浪し続けたけど、こんな、風景は初めて見たぜ！」
ジョナサン

「とにかく、驚くことが沢山あるけど

まずは、ここにある図書館で

石仮面の事について調べよう」

スピードワゴン「そうだな！」

こうして、ジョナサンとスピードワゴンは

石仮面を探して破壊する為に、長い電車と船旅を得て

東洋の都市国家 学園都市に降り立つのだった

第一部 第二話 強盗犯を倒せ!

総人口230万人の大型都市「学園都市」

そこでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、様々な能力を開花させており、

全国の学生たちの憧れの象徴と言われている

幼稚園児から、大学生まで、幅広い人たちが

その人口の八割を占めているのだった。

そんな、科学技術の最先端に行く

この都市に二人の青年がいました。

ジョナサン・ジョースターと言う、一人の紳士と

彼の盟友 ロバート・スピードワゴンがいました：

彼らは石仮面を探しに

学園都市に降り立つのだった：

すると、大きな爆発音が響いた!

ジョナサン「何だ、今の? 悲鳴が聞こえている!

一体何があったのか? 少し見に行かないか?」

スピードワゴン「そうだな、よし、行くぞ!」

ジョナサンとスピードワゴンは爆発の現場にたどり着いた…

そこには銀行の強盗犯と子供たちがいた：

強盗A「オラ! 静かにしろ! 撃つぞ!」

強盗B「オイ! 金を出せと、言っているだろ!」

強盗C「早くしろ! グズグズしていると…」

ジョナサン「これは、強盗だ!」

スピードワゴン

「何とかして止めないと!」

周囲にはたくさん人がいる!」

ジョナサン

「よし、強盗を阻止するぞ!」

僕は奴らを引き付ける！ 後に続いてくれ！」
スピードワゴン

「わかったぜ！引き付ける役は任せたぞ！」

そして、ジョナサンとスピードワゴンは

銀行強盗の前に立ち塞がった！

強盗A「何だ、お前等は？俺たちの邪魔をするつもりか？」

ジョナサン「君たち、強盗を今すぐにやめろ！」

スピードワゴン「やめないと、俺たちが相手になってやるぜ！」

強盗B「何だよ、こいつら、お前等 やるぞ！」

そして、ジョナサンとスピードワゴンは

大勢の強盗犯を相手に叩き潰した！

強盗C「こいつら、強い、強すぎる！」

強盗A「お前等 逃げろ！ このままじゃ、やられてしまう！」

強盗犯は逃げて行った：

すると、二人の前には逃げ遅れた人がいた！

ジョナサン「早く逃げてください！」

乗務員「でも、子供が一人足りないのです！ 少し前にバスに行っ

たきりで…」

ジョナサン「僕たちで、探しましょうか？」

乗務員「それじゃあ、お願いします！」

ジョナサンとスピードワゴンは子供を探しに

観光バスの辺りを探した

すると、スピードワゴンが子供を見つけた！

スピードワゴン「ジョースターさん！ 子供がいたぞ！」

ジョナサン「ああ、このままじゃ！」

強盗犯が少女を車に乗せようとしていた！

強盗D「オラ！ さつさと、乗れ！」

子ども「誰なの？ 離してよ…」

強盗D「いいから、来いって、早く！」

強盗C「何だ、このガキ！」

殴ろうとした所を、ジョナサンが少女を間一髪で救った！

ジョナサン「その子を離せ！」

強盗犯に一撃の拳を喰らわせた！

ジョナサン「大丈夫？ さあ、早く逃げて！」

ジョナサンは子供を安全な所へ逃がした

そして、強盗犯の二人が逃走しようとした

スピードワゴン

「ああ、ジョースターさん

奴らが、逃げていきます！」

ジョナサン「ああ、逃がしてしまったか…」

すると、車が突如 爆発した 宙に浮かんだ

ジョナサンとスピードワゴンは只々 驚いていた

ジョナサン「何だ？ この得体の知れないパワーは？」

スピードワゴン

「凄い早さだったぜ、一瞬にして

何が起こったでさえ、把握できないような

素早い攻撃だった、一体 何だったんだ？」

程なく、強盗犯はアンチスキルに捕まった

ジョナサン「コイツら、観念したな」

スピードワゴン「ああ、何とかなったみたいだな」

すると、子ども達がやって来た

子ども「ああ、さつき助けてくれたお兄ちゃんたちだ！」

乗務員「この度はどうもありがとうございました」

スピードワゴン「どういたしました！」

ジョナサン「無事でなによりだ！」

乗務員「何と言っているのか、本当にありがとうございます！」
こうして、ジョナサンとスピードワゴンは

強盗犯を懲らしめることに、成功した

戦いを終えて、ジョナサンとスピードワゴンは

強盗が乗っていた車を爆発させた

さつきの子に話しかけた

ジョナサン「助けてくれて、ありがとう

僕の名前はジョナサン・ジョースター 君の名前は？」

美琴「えっと、御坂美琴、だけど？」

ジョナサン「もしかして、今の攻撃は、君の能力なのか…？」

黒子「そうですねよ！ 常盤台のエース

超電磁砲の御坂美琴 お姉さまですわよ？」

ジョナサン「常盤台のエース 超電磁砲!？」

ジョナサンとスピードワゴンは

御坂美琴と白井黒子に出会うのだった。

第一部 第三話 仲間たちとの出会い

ジヨナサンとスピードワゴンは

白井黒子に話しかけるのだった：

ジヨナサン「ちよつと待ってくれ！ 少し訪ねたいことがある！」

黒子「はい、何か御用ですか？」

ジヨナサン「実は僕たち、石仮面を探しているんだ！」

黒子「石仮面？ 知りませんわね」

スピードワゴン

「あー、そう言えば

まだ、あんちゃんの名前！ 聞いていなかったな！」

黒子「私は、白井黒子と言います

ジャツジメントの第一七七支部に所属しています

探しのものなら、ジャツジメントにお任せくださいの！」

ジヨナサン「探してくれるのか？ ありがとう！ 助かったよ！」

こうして、ジヨナサンとスピードワゴンは

風紀委員の一七七支部に向かった：

ジヨナサン「ここが、ジャツジメント…」

スピードワゴン

「俺やジョースターさんの知らない事って、まだまだ、沢山あるんだな…」

黒子「それは、そうと、まずは彼女たちにも自己紹介をしないと！」

涙子「あっ！ この人！」

初春「佐天さん あっ、この人 確か、佐天さんを助けてくれた人！」

涙子「この前 殴られそうになった所を助けてもらったんだ！」

ジヨナサン「そうか、君は、この前の女の子だったのか…」

涙子「この前は、ありがとうございました！」

あつ、アタシは佐天涙子って言います！それで、こっちは…」

初春「初春飾利です！ 私もジャツジメントに所属しています」

ジヨナサン「一つ聞くけど、さつきから言っている
ジャツジメントとは、一体何なんだ？」

スピードワゴン「そうそう！俺も聞きたかったぜ！」

黒子「それでは、私達ジャツジメントに、ついて、説明しましょう
主な活動は喧嘩の仲裁や迷子の保護

落とし物の探索等の裏方仕事が多いですが

私のような、戦闘向きの高位能力者は、希少ですよ？」

ジヨナサン「高位能力者って

その、君がさつき、言っていた、超電磁砲の事か？」

黒子「そうですね、御坂美琴お姉さまは

常盤台の超電磁砲で、学園都市の中でも

高位に位置する、能力者ですよ？」

スピードワゴン「そんなに、スゲー奴なのか？」

黒子「凄いですわよ、お姉さまは、最強ですよ！」

ジヨナサン

「君も能力を持っているみたいだけど、どんな能力なのか？」

黒子「じゃあ、為に、お見せしますの！」

すると、黒子は、一瞬にして、ジヨナサンとスピードワゴンを

別の場所にへと、テレポートさせるのだった！

ジヨナサン「今 何が起こったんだ？ 一瞬にして、場所が移動し
たぞ！」

スピードワゴン「このあんちゃんは、そんな凄い能力を持っている
のか？」

黒子「そんな、いちいち驚かなくても…

まあ、いいですわ、元の所に戻りましょう…」

ジヨナサンとスピードワゴンは、元の場所に戻った…

再び石仮面を搜索を始めるのだった。

第一部 第四話 にわかジャツジメント 前編

ジョナサンとスピードワゴン

ファミレスで食事をしていると、御坂美琴が叫んでいた：その話をしばらく聞いていた：

美琴「アンタは、私のママか：！！ どう思う？ 初春さん？」

初春「とりあえず、座りましょうか？ 御坂さん？」

多分ですけど、白井さんは

御坂さんを危険な事に巻き込みたくないと思っっているのですよ」

美琴「危険ね：その、グラビトン事件にしても、そんな名前も付いているの？」

初春「最初はゴミ箱の中の空き缶だったのが

最近では、警戒心が無いものに、アルミを仕込むとか」

美琴「ひどいことするね：」

初春「白井さんは御坂さんの事を心配して：」

店員「お待たせしました！ イチゴパフェです！」

初春「じゃあ いただきます！ って、白井さん!？」

黒子「こんな所で油を売るなんて

さあ、初春！ パトロールですわよ！」

初春「パフェが：パフェが：！」

美琴「私が初春さんにつき合っただけだよ！

文句があるなら、私に言えば？」

黒子「どういたしましたして、これはジャツチメントの問題ですから！」

美琴「一般人は口出し無用って訳？」

黒子「お忘れですか？ お姉さま？」

ジャツチメントの仕事は思うよりも、大変な仕事ですわよ？」

美琴「何よ！ 偉そうに！ 二言にはジャツチメントって

だったら、一度くらい、私が不良を倒す前に来いよ！」

黒子は初春を連れて、パトロールに出かけるのだった：

スピードワゴン

「ああ、美琴ちゃん、今の話聞いていたぜ！」

美琴「ジョースターさんにスピードワゴンさん？」

スピードワゴン

「美琴ちゃん、俺も今 同じ気持ちだ！」

俺も少しは役に立つって、証明してやるぜ！」

ジャツチメントの腕章が机の上にあつたので…

スピードワゴン

「よし、美琴ちゃん、俺にいい考えがある…」

スピードワゴンは御坂美琴と何か話していた…

美琴「よし、やってやろうじゃない！ スピードワゴン！」

ジョナサン「何をするつもりなんだろう、この二人…」

一旦外へ出た…三人が辺りを見回している時

???「何 呑気にサボっているの？」

女性の声がした

美琴「えっと、私？」

???「アナタでしょう？ 応援の人は」

美琴「応援って…」

???「さあ、腕章をつけて！ 行くわよ！」

スピードワゴン

「行くって、どこにだ？」

???「仕事に決まっているじゃない！ 聞いていないの？」

美琴「仕事って…」

???「そう言えば、見ない顔だけ…もしかして、新人さんかしら？」

美琴「今日から、配属になった、御坂です！」

スピードワゴン

「同じく配属された、スピードワゴンだ！」

???「あれ、でも スピードワゴンさん 腕章をつけていませんよ?」
スピードワゴン

「いや、忘れてしまったようで」

???「もう、はいこれは予備の腕章だから」

スピードワゴン「どうも」

???「私はジャッチメント一七七支部の固法美偉だよ」

美琴「よろしくお願いします! 固法先輩!」

固法「こちらこそ…」

私もスピードワゴンもジャッチメントの仕事が

出来るって、証明してやるのだから!

矢でも鉄砲でも持って来い!

最初に連れてきたのは、コンビニ

ゴミが沢山 散らかっていた

固法「ここを片付けて欲しいって、要請が来たの」

スピードワゴン

「これを俺たちが片づけるのですか?」

固法「研修で習わなかった?

ゴミはジャッチメントが、片づけるって」

美琴「そうでしたね…」

ジョナサン(どういう訳か、僕までやらされているけど

まあ、いいか)

すると、学生がポイ捨てをした…

美琴「ちよつと、待ちなさいよ!」

学生「これ、捨てておいて…」

スピードワゴン

「待てと、言っているだろうが!」

美琴は電磁波で学生を懲らしめた…

美琴「自業自得よ、思い知ったか!」

スピードワゴン

「自分で捨てておけよな…」
すると、固法に叩かれた…

「ダメじゃない！ むやみに能力を使ったら！」
美琴「でも、アイツが！」

固法「でも、じゃない！ 治安を維持するのと実力行使は別問題よ
！」

美琴「それは…研修で」

固法「研修以前に常識で考えなさい」

このままだったら、美琴とスピードワゴン
は黒子にバカにされてしまう！

美琴「私頑張ります！ 仕事をこなして見せます！」
スピードワゴン

「俺も… 仕事をやって見せます！」「ああ…頑張つて…」
美琴とスピードワゴンは
仕事を自分なりに頑張るが、上手くいかなかった…

美琴「私ダメだな…」

スピードワゴン「俺もダメだぜ…」

固法「やっぱり、研修と現場では勝手が違う？」

美琴「地図知らずで、加減知らずで、空気読めないなんて…」

固法「私も苦手だったよ、地図の見方
知っている町でも、意外と手間取るから」

すると、電話が鳴った…

スピードワゴン「何があった？」

固法「探し物の要請が入ったわ！」

ジョナサン「探し物？」

固法「ええ、カバンを探して欲しいですって」

美琴「それって、子供用のカバンじゃないですか？」

固法「あら、よくわかったわね、ピンクのカバンだそうよ

ベンチにあったのが、犬が持って行って…」

スピードワゴン「早く捕まえないと！」

固法「誰かに持ってかれたり、落としてしまうかもしれないし」

美琴「じゃあ、どうするのですか？」

固法「回収しにいかないと！」

こうして、美琴とスピードワゴンは

カバンを探すことになった！

第一部 第五話 にわかジャツジメント 後編

二手に分かれて、搜索してカバンを探している時
不良達とぶつかってしまふ！

不良A「オイ！ 何 ぶつかっている！ シカトするなよ！」
スピードワゴン

「それは、お前たちが」

不良B「何口きいているのだよ！」

ジョナサンとスピードワゴン 美琴がそれを見ていた

美琴「ちよつと、待ちなさいよ！」

不良A「ジャツチメントかよ、何でもないよ！」

ジョナサン

「違うだろー！ 二人かかりで、殴っていただろう！」

何でもないわけないだろー！」

ジョナサンが不良を蹴って、倒した

ジョナサン「大丈夫か？ ケガは無いか？」

メガネ男「もっと早く来いよ……」

眼鏡をかけた、男が立ち去った……

すると、固法美偉が、戻ってきた

固法「御坂さん！ スピードワゴンさん！ 見つかった？」

美琴「見つかっていません」

スピードワゴン「見つからないな」

固法「ここもダメか……後探していない所と言ったら……ここね」

四人は公園を訪れた

美琴「ここって、シャレにならないですよ！」

もしこんな所に、あつたら……」

固法「犬が苦手な子もいるでしょうしね」

スピードワゴン

「そんな問題じゃないだろー！」

固法「そうね、万が一 噛まれたりしたら」
スピードワゴン「それどころじゃないぜ！」

固法「とにかく、探しましょう」

御坂さんはこっち スピードワゴンさんはそっち じゃあ、頼むわね！」

ジョナサン「僕があっちを探しておくよ」

スピードワゴン「ああ：頼むぜ、ジョースターさん」

すると、御坂の方に子供が寄って来た

子どもA「ジャツチメントのお姉ちゃんだ！」

子どもB「常盤台中学の制服着ている！」

子どもA「お嬢様だ！」

子どもC「お姉ちゃんって、スカートの下に短パンはいているよ！」

パンツはいていないの？」

子どもB「ノーパンだ！」

美琴「違う！」

子どもD「ああ、カバンをくわえた犬がいる！」

ジョナサンとスピードワゴンは御坂美琴と一緒に
犬を追いかけた！

スピードワゴンは犬を捕まえたが、勢いよくカバンが飛び
噴水に落ちそうだったが

御坂美琴が見事にキャッチした！

美琴「よし、カバンをゲットした 目標達成！」

スピードワゴン「ナイスだ！ 美琴ちゃん！」

ジョナサン「ナイス！ キャッチだったよ！」

固法「ご苦労様 お手軽ね」

美琴「そんな雑に扱う…」

そして、カバンを持ち主に返した

固法「はい、もう無くしちゃダメよ？」

初春「さすがは固法さんです！」

固法「見つけたのは、私じゃないわ」

黒子「お姉さまに！」

初春「スピードワゴンさん それにジョースターさんまで……」

固法「アナタたちは三人と、お知り合い？」

初春「御坂美琴さんですよ、常盤台中学の……」

それにしても、御坂さんが濡れていますけど……」

固法「彼が犬を探して、捕まえて、その勢いでカバンが飛んで

彼女はね、噴水に飛び込んでまで、カバンを守ってくれたの」

黒子「全く、お姉さまは……」

初春「でも、二人らしいと思いましたがよ」

固法「そんなに慌てなくてもいいのよ

御坂にスピードワゴンさん……」

ジョナサン「ほら、こっちだ……」

女の子「お兄ちゃん！ お姉ちゃん！ ありがとう！」

美琴「どういたしました」

スピードワゴン「おお、どういたしました！」

御坂美琴とスピードワゴンの

一日 にわかジャツジメント 終わり

第一部 第六話 グラビトン事件

ジョナサンとスピードワゴンが、買い物している時
この前の女の子と出会い、その子が

また、お礼を言ってくれた
別れてから、少し経つと

突然 避難警報が鳴った！

スピードワゴン

「何だ…？ 大変な事が起きているような…」

ジョナサン 「もしかして、あの子が危ない！

スピードワゴン

「洋服売り場に向かったそうだな、今すぐに向かおう！」

ジョナサンとスピードワゴンは

洋服売り場で初春飾利を見つける！

それと、この前出会った少女も…

女の子

「お姉ちゃん！ お兄ちゃんたちもいる！」

これ！ 眼鏡をかけた、お兄ちゃんから、これを渡して欲しいって

…」

スピードワゴンは

渡そうとした、ぬいぐるみが怪しそうに思っ

「何だか、怪しそうなニオイがするぜ…」

「危ない！ 触れてはいけない！」

ジョナサンがぬいぐるみを投げた、その瞬間 爆発した！

そして、ジョナサンとスピードワゴンは

この場にいた、御坂美琴と一緒に爆破事件の犯人を追いかける！

そして、路地裏で犯人を見つけた！

犯人 「これで数をこなせば、ジャッチメントも

皆殺しにすることが出来る！ あの不良たちもまとめて…」

スピードワゴンが背後から、犯人を蹴り入れた！
スピードワゴン

「よお、爆破させた、犯人はお前だろ？」

ジョナサン 「もう、目星は付いている！ 観念しろ！」

美琴 「ここまで、追い詰められたら、わかるよね？ 爆弾魔さん？」

御坂美琴が前方に、ジョナサンとスピードワゴンが後方に取り囲んだ！

スピードワゴン

「もう、逃げ場はないぜ！ 大人しくしやがれ！」

ジョナサン

「さあ、大人しく、アンチスキルに行くのだ！」

犯人 「僕にはサツパリ、何のことだか……」

美琴 「確かに威力はそれなりにあったわね

でも、死傷者もケガ人も一人もないわよ？」

犯人 「そんな、バカな！ 僕の最大出力だぞ！

外から見ても、凄い爆発だったので

中の人は助からないと思っいて……うわっ！」

犯人はスプーンを投げ出した！

すると、御坂美琴のレールガンが犯人を吹き飛ばした！

犯人 「レールガン……今度は常盤台のエアス様

いつもそうだ……何をやっても、力でねじ伏せられる……！

お前等 まとめて殺してやる！ お前らが悪いのだよ！

ジャッチメントも、その男たちもそうだ！

力のある奴らは皆 そうだろうが！」

「力……力って、歯を食いしばれ！」

御坂美琴は犯人を強く殴った！ そして、立ち去った……

スピードワゴン

「殴られて、当然だぜ、ジョースターさんは

甘ちゃんだけどよお、だが、力を言い訳にはせず

己の信じた正義と信念で戦う男さ

俺はジョースターさんに惚れて、くつついているけどな！」

ジョナサン

「スピードワゴンの言う通りだ、僕は力を言い訳にはしない
力だけでは戦いに勝つことすら出来ない

美琴ちゃんも、元々はレベル1だったそうで

今は己の信じた道に従って、レベル5にまで上り詰めたと

黒子ちゃんが、そう言っていた」

スピードワゴン

「レベル1でも、美琴ちゃんが

お前に立ち塞がっただろ、出直して

もつと、強くなつて来い、能力だろうが、波紋だろうが
身に着けて、また、俺たちに向かってこい」

こうして、犯人はアンチスキルに捕まった：

初春「白井さん！」

黒子「初春！」

初春「御坂さんやジョースターさん

スピードワゴンさんのお陰で、ほら！ この通り！」

女の子「常盤台のお姉ちゃんと

この前 カバンを探してくれた

お兄ちゃん達に助けてもらったの！」

「ねえ〜」「かつこよかつたよねえ〜」

黒子「それにしても、初春達がいた場所が無傷：

能力がどう使えば、こうなりますの？」

こうして、グラビトン事件は、

ひとまず、終わりを迎えた…？

第一部 第七話 サイレント・マジョリティー

スピードワゴンは

レベルアップパーを使い能力を手に入れた
噂が流れていて、ネットで調べた情報を元に入手したらしい
ジヨナサンや美琴に比べたら

小さな能力だが、能力者になった…

「これが、俺の能力なのか…？」

信じられないけど、音楽聞いただけで、能力が手に入るなんて

俺は今 木の葉を操っているぞ！」

木の葉を操っていた事から見ると

風力使い（エアロシューター） レベル2くらいだが

と言っても、これが戦いに役立つとは到底思えないな…

でも、今考えれば、音楽を聴いただけで

レベルが上がるなんて、おかしい気がする

突然 能力が身に付いたと解釈してもいいのだろうか…

一方 廃ビルで捕まえた不良から

レベルアップパーが “曲” だと知った黒子

早速、サイトからダウンロードしてみるが

聴くだけで能力が上がるとは信じがたい。

木山にも意見を求めるが、難しいと言われてしまう。

しかし、佐天やスピードワゴンがレベルアップパーらしきものを
持っていたことを思い出し不安になる初春とジヨナサン

「それにしても、レベルアップパーって

そんな謎の力があるのか

スピードワゴンが使っていたって

聞いてはいるけど、やっぱり不安だ」

「佐天さんやスピードワゴンさんとは、連絡がつかないし」

「それで、木山って人から聞いて “テストメント” という

装置なら可能だが、それは五感全てに作用するものらしい

聴覚のみでは難しいと考えているけどね」

その話を聞いた御坂は

曲自体が五感に働きかける可能性はないのかと言う。

共感性：風鈴の音を聴くと、なぜだか涼しく感じられるように曲を聴くことによつて

他の感覚も刺激されるのではないかと。

そして、初春飾利が電話をかけようとした…

「ひよつとして、木山さんなら何か知っているも知れない！

電話してみる！ もしも…共感性なら…」

(それなら、可能性がある、学園都市一のスーパーコンピューター

“ツリーダイアグラム”を使い解析を始めると聞き

“ツリーダイアグラム”を使うところを見てみたい)

「ジョースターさん 木山さんの所に行つて来るね」

「気を付けてね、初春ちゃん」

すると、初春の携帯が鳴り始めた！ 佐天からだつた…

「アケミが急に倒れちゃつたの」

「レベルアップを使つたら倒れちゃうなんて、あたし知らなくて…」

「おち、落ち着いて、ゆっくり、最初から」

「レベルアップを手に入れちゃつただけど

所有者を捕まえるつて言うから、でも捨てられなくて…

それで、アケミたちがレベルアップ欲しいつて…

ううん、違う 本当は一人で使うのが怖かつただけ

あたしも倒れちゃうのかな？

そしたら、もう二度と起きられないの？

あたし、なんの力もない自分が嫌で

でも、どうしても憧れは捨てられなくて

レベル0つて、欠陥品なのかな？

それがズルして、力を手にしようとしたから、罰があつたのかな
？」

「大丈夫です!! もし眠つちやつても、私がすぐに起こしてあげます
！」

佐天さんもアケミさんも、他の眠っている人たちも、みんな…だから、ドーンと私に任せちゃってください！

佐天さんきつと、あと5分だけとか、言っちゃいますよ」

「初…春…」佐天さんは欠陥品なんかじゃありません!!

能力なんか使えなくなつて、いつも、私を引つ張つてくれるじゃないですか！

力があつてもなくても、佐天さんは佐天さんです！

私の親友だから!!だから…だから…そんな悲しいこと、言わないで…」

初春は思わず泣いた…

「あははは、初春を頼ると言われてもねえ」

「わ、私だけじゃないですよ！御坂さんや白井さんや

ジョースターさんとか凄い人がいっぱい…」

「うん、分かっている…ありがとね、初春」

「迷惑ばかり、かけてゴメン、あと…よろしく」

スピードワゴンはジャツチメント一七七支部に向かい

ジョナサンに謝った…

「ジョースターさん すまねえ、間違っていた

レベルアップで能力を手に入れても役に立たないって

正直 ジョースターさんは俺の事 どう思う？」

「頼りになる、戦友 或いは話し相手かな…?」

僕は正直な所 友達があまりいなかったからな

でも、君はいつも僕に付いていくじゃないか！

どんな時でも！ どんな場所でも！

君がいてくれるから 心強くなれる気がする！」

「そうか、それなら、いいぜ！」

俺もジョースターさんも運命に導かれて

一緒にいるからな！

俺も困った時があつたら、すぐに飛んでいくからな！」

「ああ、これからも頼むよ！ スピードワゴン！」

「ああ、任せませ！ ジョースターさん！ 俺はどこまでもついていくからな！」

ジョナサンとスピードワゴンは貧民街で出会った

ジョースターさんは限りなく甘い奴かもしれないが

でも、家族を大切にして、お人好しで

どんな時でも、見知らぬ誰かを助け出す

そして、どんな時でも立ち向かう、害をもたらす者には断固戦いに挑む

正義を愛し、たとえ敵であつてもやさしさを忘れず

正々堂々を信条とし、誇りと義務を常に持つ、真の紳士

守りたいもののためには体を張り自身が傷つくことを恐れず

痛みを耐える精神力も備えていく

だからこそ！ 俺はそんなジョースターさんに

くつついている、彼の人望に惚れたのさ！

だからこそ、俺はジョースターさんの支えでいたい

そして、今となつては良き友人になつたのさ…！

第一部 第八話 対決！ 一万の頭脳！

支部に戻った美琴と黒子は

脳波データを調べるためバンクにアクセスする。

もしかしたら、レベルアップは使用者の

脳をネットワークのように繋いでいるのではないかと考える

固法美偉は、その脳を繋ぐための役割をこの脳波が果たしていて

脳をコンピュータのように繋ぎ処理能力を

高めることによって能力を上げることが出来るのではないかと。

倒れた人達は、脳の活動のネットワークに全て使われているため

昏睡しているのだろうかと言う。

そして、この脳波を持つものが、検索に引っかかる。

「登録者名…木山春生」「初春さんが!!」

「大変だ、初春ちゃんが危ない!」

初春に連絡をするが、携帯は繋がらない…

アンチスキルの出動を要請し、木山を確保することに。

木山を追おうと飛び出して行く美琴を止める黒子

美琴は自分が追うという黒子の肩を叩く

美琴には黒子がケガをしていることは、お見通しだった。

「行けませんわ! お姉さまやジョースターさん

スピードワゴンさんには迷惑をかけたくない…私が行きますわ!」

「あんたは私の後輩だから、こんな時ぐらい、お姉さまに頼んなさい」

「あ…お姉さま」

「木山の事は僕たちに任せておいてくれ」

「ああ、俺たちが必ず捕まえてやるからな！」

ジョナサンとスピードワゴン 御坂美琴は

木山の元へ向かった！

初春飾利は木山に誘拐されてしまう、

初春飾利は木山に様々な疑問を投げつけた

「レベルアップって何ですか？

どうして、こんなことをしたのですか？

眠っている人たちはどうなるのです？

誰かの能力を引き上げて、喜びさせて

何がそんなに面白いのですか!？」

「質問は一つまでにしてくれ、答えられなくなる

他人の能力には関係ない、私の目的は、もっと大きなものだ」

レベルアップは複数の人の脳をネットワークで繋ぎ

高度な演算処理を行わせるためのものだった

あるシミュレーションを行うため

ツリーダイアグラムの使用申請をしたが

どういうわけか却下された

そのため、代わりになる演算装置が必要だったと木山は話す

「もうすぐ全てが終わる、そうすればみんな解放する」

「レベルアップをアンインストールする治療用プログラム

君に預ける…後遺症は無い、全て元に戻り誰も犠牲にはならない」

木山の部屋がアンチスキルにより搜索され
手順を踏まずPCを起動したためデータが全て消えてしまう
治療する術は、初春に渡されたデータのみとなった

「その頭の花は何だ？君の能力に関係があるのか？」

「お答えする義務はありません」

すると、アンチスキルが現れた

「アンチスキルか

上から命令があつた時だけは、動きが早いヤツらだな」

「どうするのです？年貢の収め時みたいですよ」

「レベルアップは、人間の脳を使った演算機器を
作るためのプログラムだ、だが同時に

使用者にある副産物をもたらしてくれるのだよ
面白いものを見せてやろう」

アンチスキルの言う通りに、車を降りる木原を
取り囲もうとするアンチスキルだが

自分の意志に反して仲間が発砲し始める

「バカな！能力者だど!?!」

ちょうど現場に到着した御坂 ジョナサン スピードワゴンは
黒子に連絡を取り状況を確認する。

「木山が、アンチスキルと交戦していますの!」

「それも、能力を使って…」

「早くしないと、初春ちゃんが大変なことに！」

「急がねえと、初春ちゃんが危ないぜ！」

複数の能力を使っている木山 能力は

一人に一つだけが原則で、例外は無いはず。

だが、レベルアップで1万人もの脳を繋いでいる

木山なら可能かもしれないと！

「この推測が正しなら今の木山は、実現不可能と言われている
幻の存在 多重能力者 “デュアルスキル” ですわ」

木山がいる高速道路へと上がる

御坂 ジョナサン スピードワゴン

アンチスキルは壊滅状態

車で気絶している初春を見つけて近寄る。

「スピードワゴンは初春ちゃんを頼む！」

「ああ、わかったぜ、俺に任せてくれ！」

「よし、私はジョースターさんと！」

「うん、ここで迎え撃とう！」

スピードワゴンは初春飾利を救出する為に！

ジョナサンと御坂美琴は木山と交戦するのだった！

第一部 第九話 一対二の戦い!

ジヨナサン 美琴の二人は 木山春生と対峙していた!

「御坂美琴…学園都市に7人しかいないレベル5に

波紋使い ジヨナサン・ジョースター

さすがの君達も、私のような相手と戦ったことはあるまい…

君達に1万の脳を統べる私を止められるかな?」

「止められるかな?」

ですって? 当たり前でしょ!!」

「君の相手をするのは僕たちだ!」

木山が攻撃してくる隙を狙う御坂とジヨナサンだが

複数の能力を同時に使かわれ電撃は難なく防がれる。

他の攻撃も試すが、防がれてしまい

ジヨナサンの波紋もあつさりと弾かれてしまう

「もう止めにしないか? 私はある事柄について調べただけだ

それが終われば全員解放する、誰も犠牲にはしない」

「ふざけんじやないわよ!!」

誰も犠牲にしない? あれだけの人間を巻き込んでおいて

人の心を弄んでおいて!

そんなもの、見過ごせるわけがないでしょう!!」

「ああ、初春ちゃんに危害を加えた

お前を許すわけにはいかない!」

「君たちが日常的に受けている能力開発

あれが安全で人道的なものだとも思っているのか？

学園都市の上層部は、能力に関する重大な何かを隠している
それを知らずにこの街の教師たちは

学生の脳を日々開発しているのだよ

それがどんなに危険なことか分かるだろ？」

「なかなか面白そうな話ね…あんたを捕まえた後

ゆっくりと…調べさせてもらおうわ!!」

「残念だが、まだ捕まるわけにはいかない」

「空き缶…：グラビトン!？」「さあどうする？」

「全部、吹っ飛ばす!!」「凄いな…：だが」

空き缶を御坂の背後にレポートさせ、爆発させる木山

ジョナサンが御坂を抱いて、庇い致命傷を負う

「ジョースターさん…!」

「うう…大丈夫だ、少しのダメージくらい

波紋で回復できる、呼吸を整えば問題ないから」

「波紋使いの弱点は既に知っている

喉か肺だ、呼吸さえできなければ、手も足も出なくなるからな！
もつと手を焼くと思っただが

こんなものか…レベル5に波紋使い 恨んでもらって構わんよ」

「!？」「捕まえたぞ!」「何だと! 離せ!」

磁力で即席の盾を作り、爆発を防いだ御坂とジョナサン

「ゼロ距離からの電撃…あのほかには効かなかったけど

いくらなんでも、あんなとんでも能力までは持ってないわよね？」

「爆発を磁力の盾で防いで、さらに僕が庇ったのさ！ 今だ！ 美琴ちゃん！」

ジョナサンが木山の体内に弱い波紋を流し

御坂のレールガンで木山を気絶させた

すると、頭の中に直接、女の子の声が響く…

「これは…木山春生の記憶？」

私とジョースターさん

木山の間にも、波紋と電気を介した回線がつながって…」

教職免許を持っているということでも木山教授から

子どもたちの担任になってくれないかと頼まれる。

様々な理由で学園都市に置き去りにされた

「チャイルドエラー」と呼ばれる身寄りのない子どもたち。

次の実験の被験者となる子どもたちを

直接担任として受け持つことにより

細心の注意を払って調整することができ

実験を成功に導けるだろうと言われ、しぶしぶ承諾した

（せんせい、木山せんせい！）

（厄介なことになった…）

(子どもは嫌いだ…デリカシーが無い)

(失礼だし…イタズラするし…論理的じゃないし…)

(馴れ馴れしいし、すぐに懐いてくる)

(子どもは嫌いだ)

帰宅途中、雨の中で転んでしまった生徒を見つける木山。
近くにある自分の部屋のお風呂を貸してあげること。

「せんせー、私でも頑張ったらレベル4とか5になれるかなあ?」

「高レベルの能力者に憧れがあるのか?」

「私たちは学園都市に育ててもらっているから

この街の役に立てるようになっていたいなあって」

(研究の時間が無くなってしまった…本当にいい迷惑だ)

(子どもは…嫌い…だ) (騒がしいし…デリカシーが無い)

(失礼だし…イタズラするし…論理的じゃないし…)

(子どもは…)

ジョナサンと美琴は木山の脳内の記憶にある

子供たちとの思い出を読み取った

それは、嫌々ながらも、子供たちとのふれあい
が本当は楽しかった、一番幸せな時期だったのかと

二人はそう推測したのだった。

「えっ!?今の…」もしかして…」

「なんで!?なんであんなことを…」

「あれは、表向きはAIM拡散力場を制御するための実験とされていたが、実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ。暴走は意図的に仕組まれていたのさ、もつとも気付いたのは後になってからだがね、人体…実験…」

あの子たちは、一度も目覚めることもなく、今なお眠り続けている。私たちはあの子たちを使い捨てのモルモットにした!!」

「でも、そんなことがあったなら、もつと他にも方法が…!」

「23回…あの子たちの回復手段を探るため…」

そして、事故の原因を究明するシミュレーションを行うためにツリーダイアグラムの使用を申請した回数だ

演算能力を持ってさえすれば、あの子たちを助けられるはずだった!

だが、却下された!23回とも全て!!

統括理事会がグルだ!! アンチスキルが動くわけがない!!」

「だからって、こんなやり方…」

「君達に何が分かる!? あの子たちを救うためなら、私は何だってする

この街の全てを敵に回しても、やめるわけにはいかないだあ!!!」

「子供たちの事は痛いほどわかる

僕もかつてはイジメに遭って、嫌がらせにも遭い死にかけていた事も何度も遭った

だからこそ、僕にはこの子達を救う方法を見つげ出す、今はそれしか考えようがない…」

ジョナサンは悩んだ 暴走する木山に対して

どうしたら、子供が救えるだろうかを考えたが

一方的に答えが出なかった

まだ、生きているなら、救える方法や手段が

沢山あるはずだと、そう感じたのだった

第一部 第十話 取り戻すための戦い

御坂美琴とジョナサンの前に胎児が出現した…

「これは、何だろう？ ヒト 胎児？」

「胎児？メタモルフオーゼ？こんな能力、聞いたこと…」

胎児のようなものが叫ぶと

それが衝撃波となって御坂とジョナサンに襲いかかる。
電撃で攻撃を加える御坂 波紋で攻撃を加えるジョナサンだが
胎児のようなものはすぐに再生し反撃をしてくる。
しかし、反撃は一回きりで追っても来ない。

「まるで、何かに苦しんでいるみたい」

「苦しむ声が聞こえてくる、この声って…」

「すごいな…まさか、あんな化物が生まれるとは
もはや、ネットワークは、私の手を離れ
あの子たちを取り戻すことも、
回復させることも叶わなくなったか…おしまいだな」

スピードワゴンが初春飾利を救い出した！

「ジョースターさん 初春ちゃんを救い出しましたよ！
それに…何だ？ あのバケモノは？」

「あきらめないでくださいー！」

あの胎児のようなものは

AIM拡散力場の集合体“AIMバースト”

レベルアツパーによって束ねられた1万人のAIM拡散力場が
触媒となって生まれた潜在意識の怪物

言いかえれば、あれは1万人の子どもたちの思念の塊

「どうすればアレを止めることが出来るの?」

「まったく……AIMバーストは

レベルアツパーのネットワークが生み出した怪物だ

ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

「レベルアツパーの治療プログラム!?!」

「試してみる価値はあるはずだ」

「アイツは私とジョースターさんと

スピードワゴンさんとでなんとかするから

初春さんは、その間にそれを持ってアンチスキルの所へ」

「分かりました」

「本当に、根拠もなく人を信用する人間が多くて困る」

AIMバーストは攻撃をしなければ、何もしてこない。

だが、AIMバーストが向かっている先には原子力実験炉が…

「あんたの相手は、私たちよ!」「ほんと、キリがないわね」

「たつく、なんだって原子力の施設なんかに向かってくるのよ!

怪獣映画かよ!!」

「よし、俺たちも行くぜ!」「ああ、何とかして、倒さねば!」

御坂美琴 ジョナサン スピードワゴンの
連携プレイで、攻撃してもすぐに再生していた
AIMバーストも、その再生が止まる。

「悪いわね、これでゲームオーバーよ!!」

「気を抜くな!まだ終わっていない!!」

ネットワークの破壊には成功しても

あれはAIM拡散力場が生んだ1万人の思念の塊
普通の生物の常識は通用しない!!」

「話が違うじゃない!だったら…」

「核が、力場を固定させている核のようなものが
どこかにあるはずだ!それを破壊すれば」

「さがつて、巻き込まれるわよ」

「構うものか!私にはアレを生み出した責任が…」

「あんたが良くても、あんたの教え子はどうするの!?!」

「回復した時、あの子たちが見たいのは、君だろ!」

「ああ、子供たちの回復なら

俺たちがいくらでも協力してやるからよ!」

「こんなやり方しないなら

私も協力する…そう簡単にあきらめないで！ あとね…
アイツに巻き込まれてじゃない
私が巻き込んだじゃうって…言っているのよ!!!」

木山が御坂との戦いで使っていた

誘電力場で、電撃を防ぐAIMバースト

「電撃は直撃していない？だが、強引にねじ込んだ

電気抵抗の熱で、身体表面が消し飛んでいく

私と戦った時のあれは、全力ではなかったのか!？」

「よし、ここは僕とスピードワゴンが隙を作る！

美琴ちゃんはその間に止めを刺してくれ!」「わかったわ

「後に続いてくれ!」ジヨナサンの波紋連打が炸裂して

「隙だらけだぜ!」スピードワゴンが帽子を投げつけて

最後は御坂美琴

ごめんね…気付いてあげられなくて

でもさ、だったらもう一度頑張ってみよ

こんなところで、くよくよしてないで

自分で自分にウソつかないで…もう一度!

御坂美琴のレールガンが

胎児の核心部分に炸裂した! そして、爆散した

「これがレベル5に波紋使い…」

こうして、木山はアンチスキルに連行された
「あの…その、どうするの？子どもたちのこと」

「もちろん、あきらめるつもりはない、もう一度やり直ささ

刑務所だろうと、世界の果てだろうと、どこだろうと

私の頭脳はここにあるのだから、ただし、今後も手段を選ぶつもり
はない

気に入らなければその時は、また邪魔しに来たまえ」

ジヨナサンとスピードワゴンの戦いは、まだまだ続く

第一部 第十一話 スキルアウト

木山による、レベルアツパー事件は終結するが
レベルアツパーを聴いた

スピードワゴンに何故 倒れなかったかを聞いてみると：

「他の聴いた人は次々と倒れているのに

何故 スピードワゴンは、倒れないんだ？」

「いや、それが俺にはわからないが…

木山と戦っている時に 俺は少し頭痛を起こした」

「レベルアツパーを聴いた人は、全員 倒れているわけじゃなく
稀に頭痛やめまいが起きる程度の人もありますけどね」

「ああ、初春ちゃんのおかげで説明がついたよ」

「おお、それなら、いいけどな…」

そんな ジョナサンとスピードワゴンの前に
一つの事件がまた起きるのだった

各地で能力者狩りが発生している

実行犯の組織の名は “ビッグスパイダー”

昔は、それなりのプライドを持って一線はわきまえていたが
最近では単なる無法者集団になっていた。

今では闇ルートから武器を

手に入れているという情報もある。

更に初春の調査で

ビッグスパイダーのリーダーの名前が判明する。

名前は「黒妻綿流」：仲間も平気で裏切るような男で背中にクモの入れ墨を入れているという。ただの仲間割れだったのかと、疑問に思う。

まずは、ビッグスパイダーの根城である第10学区通称「ストレンジ」へ調査に向かうことに。

だが、固法は報告書をまとめなければいけないと言い代わりにジヨナサンとスピードワゴン

御坂が黒子に同行する。

ストレンジに入った途端、からまれてしまう四人するとそこに、片手に牛乳パックを持った男が割って入ってくる。

女の子に手を上げるのはよくないと諭す

牛乳パックの男だったが、

牛乳パックを叩き落とされた事が、

腹を立てたのか、

いとも簡単に男たちを撃退してしまう。

「やっぱり牛乳は、武蔵野牛乳だな」

「助けてくれなんて、言った覚えはないけど」

「そりゃ悪かったな」

「昔の知り合いに、君たちくらいの女の子がいてさ」

「ほっとけなかったんだ」

2年ぶりに、ストレンジに帰って来たと話す牛乳パックの男

黒子がビッグスパイダーのことや黒妻綿流の事を聞くが知らないと言って立ち去ってしまう。

ストレンジをいくら探しても見つからなかった
だが街中で、簡単に能力者狩りをしているところを見つけ
すぐさまビッグスパイダーのアジトを聞き出し
乗り込んでいくのだった：

これくらいの手相手ならと余裕を見せる黒子だが
車に搭載されたスピーカーから発せられる音で頭が痛くなり
能力が上手く使えなくなってしまう。

そして、御坂やジョナサンも
電撃と波紋を上手くコントロール出来なくなっていた。
スピードワゴンも身動きが出来なくなってしまう

「こいつは、ギャパシテイ・ダウン」って、システムでな
詳しいことは知らねえが、

ようするに音が脳の演算能力を混乱させるのだよ」

「黒妻さん許してくださいって言うなら、

考えてやってもいいけどな」

「へえ、今は黒妻っていうの？」「黒妻…さん」

システムの線を引きぬいて音を止める黒妻

「蛇谷、久しぶりだな」「ウソだ…あんた、死んだはずだ…」

「あれだけのことがあって、生きているはずがねえんだ!？」

黒妻に向かっていくビッグスパイダーたち。

だが、あつという間に倒され、

蛇谷は仲間を置いて逃げていく。

「あの男、黒妻じゃないの?」

「昔は『蛇谷』って、いっただけどなあ、
今は黒妻って呼ばれているらしい」

「じゃあ、本物の黒妻は、君なのか…?」

「そう呼ばれたこともあったかな やっぱ牛乳は…」

「武蔵野牛乳」…「固法先輩?」

「久しぶりだな、ミイ」

「先輩…生きていたのですね」

「みたいだな」

「なんで…なんで、何の連絡もくれなかったのです!?!」

「私、てつきり…」「安心しろ、すぐに消えるさ」「先輩!!」

固法と黒妻が知り合いだと聞いて驚く一同たち

2人に説明を求められるが、上手く説明できない御坂に
珍しく何も語らない黒子 このモヤモヤを晴らすため

固法に直接聞きに行こうと言い出す佐天だが

固法はここ数日、支部にも顔を出していなく、

連絡も取れないらしい。

そのこともあり、みんなで固法の部屋を訪ねることに。

部屋から出てきたのは、固法のルームメイトの柳迫だった。黒妻のことが聞きたかったと言うと

柳迫は固法と黒妻のことを知っている様子。

部屋に入れてもらい話を聞くことに。

昔、固法はビッグスパイダーのメンバーだった。

能力の壁にぶつかり悩んでいた固法：

そんな時に、男の子を助ける黒妻たちを見かける。

スキルアウトといつても

当時は気の合う者たちが集まってバカやっていただけ。

そんな彼らが輝いて見えた固法は、能力者だということを隠してビッグスパイダーに入ったらしい。

「分からない：固法先輩がスキルアウト

だったのも、シヨックだけど」

「だからって、なんでジャツジメントを休んでいるの？

なんか関係あるわけ？」

「昔は昔じゃない！今は先輩、

ジャツジメントで頑張っているわけじゃない？」

「なのに、何で今さら」

「そんな簡単に、割り切れないじゃないかな」

「過去の自分があって、今の自分があるわけだし」

「それに、その過去が特別なものだとしたら、なおさら…」

固法の行動が理解できず、悶々とする御坂
すると支部に、アンチスキルからの連絡が入る…
ストレンジで一斉摘発を行うと。

それは当然、ジャツジメントである固法にも伝わる
それと、ジョナサンとスピードワゴンにも、
この事を伝えるのだった。

アンチスキルによるストレンジの一斉摘発が始まる。
ストレンジへ向かう固法の前に、御坂たちがあらわれる。

「やっぱり、こうでなくっちゃ」「これ…私の」

「固法先輩、カツコイイですよ」

「終わらせに来たぞ」「コイツ、この前の…」

「分かっているだろうけど…俺は、強いよ?」

「コイツらは僕たちが倒す! 彼女たちには手を出させない!」

「ああ、俺とジョースターさんとで後始末してやる!」

ジョナサンとスピードワゴンが拳を振ろうとした、その時…

「ああ、確かにアンタは強いが、そんなの能力者と一緒だ!
数と武器には敵いつこねえんだ!!」

「待ちなさい!!」

「ミイ…カッコイイじゃないか」

「固法さん!？」

「蛇谷君、あんた随分下衆な男になり下がったわね」

「数にものを言わせて、そのうえ武器?」

「うるせえ!!俺たちを裏切って

ジャツジメントなんかになったヤツに何が分かる!?

「コイツらに俺たちの力を見せてやれ!!」

「今度は、直接体内にお見舞いしましょうか?」

「俺たちにはアレが…」「アレって、コレのこと?」

「まさか、同じ罠に二度引つかかるなんて、思っていないわよね?」

「みんなは、手を出さないで」「たまには、先輩を立てなさい」

追い詰められた蛇谷は、身体に巻きつけたダイナマイトで脅す。

「蛇谷、昔は楽しかったよなあ、みんなでつるんで、

バカやって、それが、どうしちまった?」

「来るな、来るな!」「どうしちまったよ、蛇谷」

「しろうがなかった…しろうがなかったのだよ!

俺たちの居場所はここしかない!

ビッグスパイダーをまとめるには、俺じゃなきやダメだった
だから、今さらテメエなんか、いらねえんだああ!!!」

「蛇谷、居場所っていうのは…自分が自分でいられる所を言う」

「ほら、ミイ」…」

蛇谷はこの場で倒れた、固法美偉によって倒された。

そして、固法美偉が自分自身で

「黒妻綿流、あなたを暴行傷害の容疑で拘束します」
影響を与えてくれた、恩人をこの手で捕まえた…

「その革ジャン、さすがに胸キツくねえか？」

「そりゃ、毎日アレ飲んでいましたから」

「やっぱり牛乳は、武蔵野牛乳!」

「(先輩、ありがとう…)」

こうして、戦いが終わった後、
ジョナサンとスピードワゴンは、

一旦 御坂美琴達から、身を引くことになり、

石仮面の調査をするため、別行動をとることになった。

乱雑開放（ポルターガイスト）編
第二部 第一話 学園都市のジヨジヨ

ここは、人口およそ、230万人の都市国家
学園都市

そこに、一人のイギリス人の青年が、
見物しに、やって来た。

「アンタ、どこから来たの？」

へえ〜イギリスからか！

じゃあ、マネーカードはあるか？

ここでの掟は、マネーカードだけ？」

青年は、カードを差し出した

「おお！ 確かに！」

じゃあ、コラコーラ、一本な！」

そして、青年が道を歩いていると、
ナンパを見かけた

「あの…何なんですか？」

「そこを、のいてください！」

「えー？ キミ、可愛いじゃねえかよ？」

俺達と遊ぼうぜ？」

「そうだぜ！ へっへっへっ」

「それでも、皆さんは

ジャツジメントなんですか!？」

「こんなことして！」

「関係ないだろ？」

とにかくさ、行こうぜ？」

何も悪さしねーからよ！」

それを見た青年は、ジャツジメントの腕章をつけている

ナンパ男に話しかけるのだった。

「あのくその…ジャツジメントさん？」

「ちよつと、いいですか？」

「なんだ、お前は？」

「彼女たちは、私のガールフレンドなんで、

離してもらわないと、困るんだけどよ？」

「ああ？　じゃあ、そのガールフレンドの

名前　言つて見ろ！」

「なんでだ？　なんで、こんな、

下らないことをしている？

日本人の男つて言うのは、

本当に礼儀がなつていないな！」

「んだと！」

「おい、あの外国人野郎、殺つちまうぞ！」

青年は、ジャツジメントを、ボコボコに

殴り倒した…

「痛い…」

「何て奴だ…」

「じゃあ、さつさと消え失せろ！」

「この、日本人が！」

ジャツジメントの二人は、

立ち去つた…

「大丈夫か？」

「あつ、はい…」

「助けてくれて、ありがとうございます…」

「あつ、アタシ、佐天涙子つて言うんです！

名前は？」

そして、女の子を助けた青年は、こう名乗った。

「ジョースター ジョセフ・ジョースター」

「ジョジョって、呼んでくれ」

「ジョースター…?」

「どこかで、聞いたことがあるようで、

無いような…」

「あつ、私 初春飾利って、言うんです!」

「うーん?」

「佐天さん、どうしたんですか?」

「この人、ジョースターさんに

似ているような、気がするんだよねー

特に顔が」

「確かに…」

「俺が、誰と似ているんだって?」

「あつ、何でもありません!」

「そうです! そうです!」

「じゃあさ、俺が奢ってやるから、

レストランに行かねーか?」

「いいですけど…」

「ちようど、お腹が空いたところだし、

この人 悪い人じゃ、無さそう」

「そんな気がする」

こうして、初春飾利と佐天涙子は、

ジョセフと一緒にファミレスに向かった。

そして、ファミレスに来店した時

トラブルが、起きた

「おい! ウエイター! ウエイター!」

「は、はい! どうされましたか?」

「このレストランの対応が、

なつてねーんだよ！ああ？」

「大変申し訳ございません…」

「コイツ、許せねー奴だな…」

「ジヨ、ジヨセフさん…？」

ジヨセフは、立ち上がって、
そのクレーマーに指をさした

「オイなんだよ？ お前は？」

「へい！ 兄ちゃん！」

メリケンサックをお探しなら、
ジャケットのポケットにあるぜ？」

「あつ！」

「お前は次に、何で、メリケンサックが
ある事を知っているんだ？」

と、言う！

「何で、メリケンサックがある事を
知っているんだ！ ハッ！」

「お前のシャツに返り血がついていたら、
分る事だ！ 人を殴つて来たばかりだな！」

「ああ？ それが、どうしたんだよ！」

「次のセリフは、何なんだよ！ このガキが！
だ！」

「何なんだよ！ このガキが！」
と、クレーマーが、ジヨセフに
殴りかかった！

そして、ジヨセフは、
その、クレーマーをボコボコにした…
拍手喝采だった。

「すごい…ジヨセフさん…」

「どうだ？ お前の様な、単純脳みそ野郎の
考えるパターンは
全てお見通しなんだよ！」

すると、美琴と黒子がやって来て…

「ジャツジメントですよ！」

「白井さん！」

「あら、初春と佐天さんも、いましたの？」

「大丈夫だった？」

「初春、この人は？」

「ジョセフさんだよ、私たちを助けてくれた人で…」

「そうなのですよ」

「ジョセフさん…でしたっけ？」

アナタを、拘束します！」

「ああ？ なんなんだよ！ あの、小娘は！」

こうして、ジョセフは、ジャツジメントの一七七支部に
拘束されるのだった。

第二部 第二話 一緒にデート

風紀委員一七七支部

ジョセフは、そこに拘束されていた…

「おい！ 俺をどうしろって、言うんだよ！」

「身元引受人が、やって来るまでは、

この状態ですよ」

「んだと！ だから、離せよ！

このロープ！」

「騒がしいな、ジョジョ」

「お前は！ シーザー！」

「待たせたな、全く、みつともないな」

「ようやく、現れましたの」

「全くだ、ジョジョが迷惑かけたな」

「俺は、悪さなんてしてねーぜ！

むしろ、人助けだ！

なあ！ 涙子ちゃん、初春ちゃん！」

「そ、そうですけど…」

「おお、なかなか、可愛い

シニヨリーナじゃないか

気に入ったぜ」

「だから、このロープと手錠

早く、離せよ！」

「わかりましたから、

ジョセフさん、騒がないで欲しいですよ」

と、黒子はジョセフの身柄を自由にさせた

「これで、いいのですの？」

「おう、いいぜ、

にしてもだ、オメエ、可愛い癖に

生意気なんだよ！」

「あらあら、そんな事、言っても、いいですよ?。」

「ああ? オメエ、俺より年下だろうが!。」

「ジヨセフさんって、何歳?。」

「18歳だけど?。」

「俺は20歳だ。」

「私たち、中学生ですから、

あんまり、年上の人には…

ねえ、白井さん…。」

「わかりましたの、少々 言い過ぎましたの。」

「それで、ジヨジヨ

これから、どうする、つもりだ?。」

「どうするって、まあ…

涙子ちゃん、初春ちゃん、

ヒマだったら、俺たちと遊ばない?。」

「いいですけど…。」

「まあ、私でよければ…。」

「全く、初春も佐天さんも、

油を売って…:どうなっても、知りませんよ?。」

「わかってますよ!。」

「じゃあ、行きましようか!。」

「おう!。」

しかし…

「どうだい? シニョリーナ?。」

僕は、こんな能力を持っているんだぜ?。」

シーザーは、シャボン玉で芸や手品を

初春飾利と佐天涙子に披露した…

「うわー! シーザーさんって、

こんな、能力を持っているんですね!。」

「シャボン玉きれい!。」

いつ以来だろう…シャボン玉 見たのって…」

「キレイだろ？ シニヨリーナ？」

「はい！ とっても、キレイです！」

「もう、惚れ惚れしちやいそうです！」

「そうかい？ まだまだ、芸や手品は、あるんだぜ？」

と、シーザーは、

シャボン玉で、芸や手品を披露するのだった。

「ケツ、シーザーの奴 いい気になりやがって！」

「あつ、そう言えば、ジョセフさん

気になることがあったんだった」

「なんだい？」

「実は、この写真…ジョセフさんと
顔が似ているような気がして…」

そこに写されていたのは、

ジョセフの祖父、ジョナサンと

若い頃のスピードワゴン

そして、御坂たちの集合写真だった。

(これって…)

「この人に、見覚えありますか？」

「うーん、この人

どこかで、見たことがあるようで、無いような…

にしても、ありえるのか？」

「なにがですか？」

「だって、この写真

俺の祖父 ジョナサン・ジョースターと

若い頃のスピードワゴンが写っているじゃねえーか！」

「祖父…若い頃…？」

「何がどうなっているんだ！」

俺のじいさんは、とつくの昔に、死んでいるはず！」

「ジョースターさんが、死んでいる…？」

「どうということなんだろう…」

「まあ、考えても仕方ない、

じいさんに、直接会って話に行くしかないか」

「俺としても気になるな、この写真

ジョジョの祖父や、若き日のスピードワゴン

ぜび 会って、色々話を聞きたいところだ」

「それで、じいさんたちは、どこにいるんだ？」

「それが、連絡がつかないんですよ」

「石仮面の研究をしに、それっきり、

連絡が来なくて…」

「石仮面…？ この学園都市にも、

石仮面があるのか？」

「どうやら、世界中にあるようだな…」

「密売業者の連中でも、探しに行くか」

「ああ、それで、石仮面の行方をあぶりだせば、

じいさんに会えるかもしれないな」

こうして、ジョセフとシーザーは、

初春飾利と佐天涙子と共に、行動するようになった。

第二部 第三話 ポルターガイスト

シーザーはペンダントを探していた…

それも、大切にしているという事で

周囲を当たって、探し出せた！

「うわあ〜！ ありがとうなの…」

「無くさないように、大切にしておね」

それから、数日後

初春飾利に新しいルームメイトが来るという事で

引越しの手伝いをする事になった

「紹介するね、新しく入って来た、春上さん…」

「春上矜莉なのって…アナタはこの前

ペンダントを見つけてくれた、人なの…？」

「君はこの前の女の子だったのか…」

僕の名前はシーザー・ツエペリ よろしく」

「この前は見つけてくれて、ありがとうなの…」

「どういたしまして」

「俺はジョセフ・ジョースター

で、こつちが常盤台中学の御坂美琴に白井黒子

後 柵川中学の佐天涙子」

「よろしくね」

「って、心配なのは佐天さんですけどね？」

「えっ?」

「私のように、スカートめくらないでくださいよ?」

「うう…めくるのは初春だけだっただけ…」

「それでも、ダメですって!」「ああ…はいはい!」

白井黒子のテレポートで、荷物が中に移動して
そして、ジョセフとシーザーが
部屋に家具を置いてきた…

「これで、全部かな?」

「ありがとうございます…」

わざわざ、手伝ってくれて…」

「このくらい平気だぜ、

さて、俺とシーザーは

この後 用事があるから

後はゆっくりしてな!」

「僕とジョジョは

今から資料をまとめに行くから、楽しんできてね!」

「じゃあ、二人が行きましたし

私たちがどこかに遊びに行きませんか?」

「そうだね…どこに行こうかな…？」

「じゃあ、クレープが食べたいなの！」

「よし、それじゃあ、行こう！」

五人はクレープを食べに行つた…

ジョセフとシーザーは

初春と春上の部屋を後にして、固法の元に行ってしまった…

合同会議に参加する、固法 ジョセフ シーザー
後でみんなに知らせるつもりだ
公民館で講演会を聞いていた…

最近頻発している地震は“RSPK症候群”

同時多発が原因だと“MAR”のテレステイナから説明される。

RSPK症候群とは、能力者が一時的に自律を失い
自らの能力を無自覚に暴走させている状態。

これが同時に起きた場合、暴走した能力は互いに融合し
一律にポルターガイスト現象として発現する。

このポルターガイスト現象が規模を拡大した場合
地震と見分けがつかない程になるという。

そして、RSPK症候群の同時多発の原因は、現在調査中とのこと。
参加者には、混乱や集団ヒステリーを起こさせないため

これをオカルトと結びつけてウワサする生徒を
注意して欲しいということだった。

そして、ジョセフとシーザーは

固法の資料作りの手伝いをしていた

御坂達は花火大会で花火を見ている間だった…

春上衿衣の能力について調べた所

能力は“テレパシー”のレベル2で

AIM拡散力場に干渉するほどの力ではなかった。

しかし、特記事項に気になる情報を書き込まれていた。

“特定波長下においては、例外的にレベル以上の

能力を発揮する場合がある”

ポルターガイストには、AIM拡散力場が関係している

AIM拡散力場と聞いて、木山のことを調べる

ジョセフとシーザーだったが、

木山は特別拘置所に拘留中だった。

同時に春上のことが、少し気になっていた：

それから、一時間後 地震が起きたと同時に

春上が病院に運ばれたと、初春飾利宛に、

メールが届いた

ジョセフとシーザーは翌日 病院に向かうことになった。

第二部 第四話 声

翌日の夕方 資料をまとめ上げた後

ジョセフとシーザーは

春上衿衣の部屋にやって来た：

「大丈夫？ 衿衣ちゃん？」

「大丈夫なの、お気遣いありがとうなの…」

病院のベッドで目を覚ます春上…

初春は、検査前に預かっていたロケットを返す。

「友だちとの思い出なの…声がね、聞こえるの」

「声が？それって、テレパスの」

「たまにだけど…でも、それを聞いていると

ボーっとしちやって」「じゃあ、あの時も？」

「枝先絆理ちゃんっていうの」「その子!?あの時の…」

「絆理ちゃんを知っているの？」

「それは…」「あのね、私も…チャイルドエラーなの」

「僕と美琴ちゃんが、木山の記憶を見た時

彼女の顔を知った、まだ、絆理ちゃんが

どんな子は知らないけど、教えてくれないか？」

「えっとね…絆理ちゃんってね…」

幼い頃はいつも一緒に遊んでくれたなの…

いつも、私に親切に接してくれて、よく話をしてくれたなの…
でも、ある日 別の施設に行くことになって
それっきり、離れ離れになった なの…」

「そうだったんだな…」

「ああ…寂しい気持ちになるぜ…」

後日 春上の聞こうと初春に電話をする佐天

しかし、電話の聞こうからは初春の泣き声が

「あれ…初春…？ どうしちやったの…？」

「春上さんが…う…うう…」

MARの施設であったことを話す初春

木原幻生の論文から調査したところ

テレステイナが幻生の孫だということが判明

しかも、実験の最初の被験者で、実験の手伝いまでしていた。

どうしようと、泣きじゃくる初春

シーザーがハンカチを渡し、初春は涙を拭いた…

「うう…シーザーさん ありがとうございます…」

黒子は初春の頬を叩いた！

「いつまで、そうやって泣いているつもりですか？」

他にもっとやるべきことがあるでしょ

いつになったら、ジャツジメントの初春に戻ってくれますか？」

黒子に頬を叩かれ、目を覚ました初春は

テレステイナと子どもたちの行方を追う。

そして、御坂とジョセフは

ジャツジメントから姿を消していた。

間違いない、木原が黒幕であることに気付いたからだ！

「あれ…？ お姉さまがいませんね…？」

「ジョジョ…ひよつとして、アイツ！」

シーザーは急いで、病院に向かった！

そして、ジョセフとシーザー

御坂は春上がいる、病院の入り口付近にたどり着いた！

「ダメしたわね」「怒った？」

「木原幻生の孫娘、それでいて能力体結晶の最初の被験者…

お祖父さんの実験台にされるなんてな！」

「なのに、君は幻生の研究を手伝い、

子どもたちを連れ去った」

「一体、どういうつもりだ!？」

「良く調べたじゃねえか、お利口さん

けどなあ、どういうつもり？と聞かれて答えるヤツはいない！

そんなに知りたきや、力尽く 言わせてみろ！」

能力や波紋を使おうとするが、急に使えなくなる。

「キャパシティ・ダウン…どうして、あんたが!？」

「だって、これを作ったのは、私だからだよ！

スキルアウトに試作品を流したら、たくさんデータが集まって
おかげで、かなり性能アップしたけど

今の段階は使いにくいけど、むしろそれが好都合！

スキルアウトでも使い方次第じゃ、役に立つなあ…」

「ふざけんじやないわよ…」

スキルアウトは、モルモットじゃない!!」

「よくも、子ども達を…!」

シャボン・カッター!」

しかし、跳ね返された!

「うわっ!」「シーザー!」

「さてと、こっちのガキはどう始末してやろうか?」

ジョセフは木原の攻撃に倒されてしまう…

そして、残された御坂美琴は…

「あなたみたいな娘って、本当に素敵

正義感にあふれて頑張り屋で…そういうあなたや

お友だちのお陰で、あの子どもたちを見つけることが出来たわだから褒美に教えてあげる

私の目的は、能力体結晶を完成させること

じゃあ、ここで三人仲良く、ここで倒れておけ!」

首を絞められ、意識を失う御坂

テレスティーナは御坂とジョセフ

シーザーの始末を部下に任せ、子どもたちの移送先へ…

絶体絶命の三人

果たして、木原の野望を止めることが出来るのか?

第二部 第五話 最終決戦

病院のベッドで目を覚ます御坂

だが、目が覚めた途端にテレステイナを追おうとする。

「私が勝手に研究所に忍び込んで、頭にきて…」

せっかく見つけた子どもたちをテレステイナに…

全ての責任は私にあるの…だから、私があの子を止める!!」

すると、佐天涙子が前に立った…

「いま、御坂さんの目には何が見えていますか？」

「何って、佐天さんだけ…あつ…

私…ごめん…私、なんか見えなくなってきた、

また、みんなに迷惑かけて…」

「迷惑なんかじゃないです」

「でも、離れて心配するくらいなら、一緒に苦労したいのです

だって、それが友だちじゃないですか

そうですよ！私たちもいるのですから」

「ありがとう、みんな」

そして、ジョセフとシーザーも

御坂美琴の前に現れた…

「大丈夫だ、僕たちも、向かう

そして、絆理ちゃんも、衿衣ちゃんも助け出すよ！」

「俺たちも、協力するからよ！

だから、心配するな！」

「ジョセフさんに、シーザーさん…」

「絶対にあの子たちを助け出して、奴の野望を止めよう…」

「ああ、奴の野望を絶対に止めないと！」

ジャツジメントの支部に戻り

事情を説明してアンチスキルに協力を仰ぐ黒子たち。

テレスティーナの足取りを追ってくれと頼むが

そう簡単には動けない、限界があると。

「こちらも、出来る範囲が限られている」

「限界を超えることに、意味があるじゃないのですか!？」

「このままじゃ、子どもたちが危険ですよ！」

「お前は特別講習の…少し時間をくれ」

アンチスキルから監視衛星の映像を入手する黒子たち。

MARのトレーラーは17学区に向かっていた…

木原幻生が所有していた私設の研究所へと

そして、トレーラーの後ろを走っている木山の車も見つける。

「あれ？この記録…」

「木山の奴 早速向かっているみたいだな…」

「ああ、急いで後を追おう」「さて、行きますか！」

「待つて！ 腹が減つては戦が出来ぬ！ さあ、沢山食べなさい！」

「いよいよ、最後の戦いが迫つて来るな…」

「ああ、リサリサ先生がいたら…心強いのに…」

「そうだな、先生もいてくれたらな…」

「それでも、必ず助け出さないと！ どんな手段を使おうと！」

MARのトレーラーを追跡する木山

しかし、トレーラーの中から、パワードスーツが現れ…

「つたく、何が楽しいのか知らないけど」

「手の込んだイタズラですわ」

「なぜ、君たちがこんなところに!?!」

「木山先生！この車は囿です」

御坂 ジョセフ シーザーは

黒子のレポートで目的地までたどり着いた…

初春と佐天は固法のバイクでやって来た…

「間に合ったぜ！」「さあ、目的地まで行こう！」

ジョセフ シーザー 初春 佐天の四人は

木山春生が運転する車に乗った…

「先輩！」「オーケー！」「さあ！ 行くわよ！」
御坂美琴は固法美偉の運転するバイクに乗って
木山の車を追うことになった

「さっきの舞台が出発した後 民間を装った、車が二台
アンチスキルの監視衛星で目撃されました！」

「恐らく、そちらが本物のようだな…」

「ああ…待っているよ、今すぐ助けに行くから！」

「私はまんまとダミーに掴まされた訳か…」

「急ぎましょう！ もう目的地に着いたみたいですよ！」

「場所は？」

「23学区にある、使われていない、システム施設
…この先の分岐点を左に！」

「何かが来るぞ！」「追跡されている！」

「あれ…？ 美琴ちゃん…？」「何している…？」

「もつと、スピード出して！」

「言われなくても、やっている！」

「ゴメン…アタシ…間違っていた…」

「立場が違えば、同じことをしていた…」

「失敗の埋め合わせは……ここで……！　するから……！」

「凄まじい、電撃波だぜ！」

「眩い光のように、輝いているぜ！」

「電撃が弾かれた？　だったら……これで！」

「ダメだ！　全然届いていない！　うわっ！」

「次の分岐点も左に！」

カーチェイスは終わりそうにない……

巨大トラックに追いかけてられている！

「また……追って来る！」「しっかり捕まって！」

「助ける……どんなにあがこうと構わない……」

子ども達を助けるって、誓った……どんな手段を選ばずとも……

教師が生徒を諦める事なんて出来ない！」

「当たり前だよ……子供たちを助けるために、ここにいるのだから！」

「あつ……美琴ちゃんが、押されている！」

「いや違う！　むしろ、吸い寄せているぞ！」

「凄い威力だ！　物を次々と飛ばして行くぞ！」

「何てことだ……波紋とは比べ物にならないくらい強い……」

あれだけ、強い威力が出せるなんて……」

大型トラックは爆発した！

「御坂さん！ 白井さん！」「二人とも、大丈夫か？」

「ケガは無いか？」「平気だよ！」「助かった…」

「待って、それは子ども達を助けてからでしょう？」

こうして、木山 御坂 初春 白井 佐天

ジョセフ シーザーの七人は

第二十三学区のシステム施設に向かうのだった…

いよいよ、最後の戦いが刻一刻と迫っていく！

第二部 第六話 命を懸けた戦い

初春飾利はモニター室に来て

早速 パソコンの操作をするが、思ったよりも進まない

「どうだ？ わかりそうか？」

「もうちよつと、プロテクトが固くて」

「全く、お姉さまが一人残らず、お片付けになるから」

「しようがないじゃない！」

さつきは誰もいないって、思っていなかったし」

「あつた！ 今回の施設内で一か所だけ

消費電力が桁違いの場所 最下層ブロックの」

そして、七人は早速 最下層に向かった…

「見つけた…」「子供たちも無事のようだな」

「ああ、後は子どもたちを助けるだけだな！」

「春上さん！」「衿衣ちゃん！ 無事のようだね」

「えつと、ここのシステムは」

「ちよつと、待っていてくれ、向こうを見て来るからよ！」

「待っていて、今助けてやる！」

すると、超音波がなりだし、耳障りになっていた！

「この音は…?」「うう、耳が…」

「さっきの例だ!」「御坂さん! 白井さん!」

「貴様…!」

「キャパシティダウンですね!」

ジョースターさんが言っていた…
能力を使えないようにする、音だって…!」

「それが分かったところでどうするのか?」

「確か…改良型は大きくて…」

固定した、スピーカーを移動できないって!」

「この施設中に設置したのさ! 一個ずつ壊してもいいけどな…?」

「それだけ、大きなシステムなら、制御できる場所は限られます!」

個々の建物を調べた限り、それが出来るのは…

私たちがさっきまでいた、中央管制室!」

「だったら…やってみろ!」「うわああっ…!」

木原が初春飾利を殴ろうとした時

シーザーが間一髪で初春飾利を庇った!

「大丈夫? 初春ちゃん?」「シーザーさん…!」

「うう…何としても…止めないと!」

ジョセフは重傷を負ってしま…

「あーあ 女の子を庇って、ヒーロー気取り？
うるさい、奴らだな…せっかかないいものを
見せてやろうと思っていたのに…
まあ、茶番はそれまでにして、能力結晶体の完成よ！」

「何で…アンタだって、犠牲者じゃない！
お祖父さんの実験台になって…能力を暴走させられて！」

「犠牲なんかじゃない…権利を得たのさ…
手に入れた、種を花開かせて…」

「それは、まさか、ファーストサンプル!？」

「レベル6を誕生させる権利を!」「レベル6、だと?」

「そうだ! コイツは学園都市 初のレベル6になる!
この子どもたちの力を使って!」

「まさか、衿衣ちゃんを?」「春上さんが、そんな」

「特定を超えた、レベルを受信する能力
コイツの能力は能力結晶と合わせるのに、実に好都合だ
高位のテレパスは希少だからな」

「何故…なぜ…またこの子達が
なぜ、この子達 ばかり苦しめる!」

「頭の中の現実を拝借するだけで」

「パーソナルリアリティーだ…」

「呼び方はどうでもいい…脳内活動を司る、神経物質
能力を採取して、ファーストサンプルと融合させる
結晶は能力を獲得 完全なものになる！
祖父はその事に気づかず、ひたすらマイナーチェンジに
こだわり続けた！ 気を取られていたようだな！
さて、後はコイツを！」

すると、御坂美琴が立ち上がった！

「やめなさい！ そんな事で…この子達がこのまま
暴走状態になって、目覚めたら！」

「学園都市は壊滅する 上等じゃないか！
神ならぬ、天上の意志にたどり着く者！
その為の学園都市だよ！
レベル6が誕生すれば、この街は用済みだ！」

木山春生とジョセフが、木原に歯向かった！

「うおおお！」「うわああつ！」「手を焼かすな！」
二人は蹴り飛ばされた…

「木山先生！」「ジョジョ！」

「面白い事、言ったな、

スキルアウトはモルモットじゃないって…
どう見ても、スキルアウトがモルモットだよ！

お前等 全員がモルモットだ！
学園都市は実験動物の飼育場
お前らは一人残らず家畜だよ！」

「そろそろ…トドメと…何だ？」

「モルモットだろうが…何だろうが！
そんなの…知ったことじゃない！」

「これって」「佐天さん！」

「涙子ちゃんの声だ…」

「アタシの友達に、手を出すな！」

「よし、これで形勢逆転だ！」

「もういい、わかったよ お前らこの施設ごと
まとめて、吹っ飛ばしてやるよ！

このレールガンより、強力なビームで
くたばれ！」

「モルモットだの、家畜だの

どれだけ、自分の哀れさを知らないのか
そこまで、逆恨みが出るなんて
一人でできないことは、みんなと一緒になら！」

「何でもできるって事さ！ 美琴ちゃん
レールガンの力を俺たちに与えてくれ！」

「分かったわ…レールガンと波紋の二つの力で！」

御坂美琴のレールガンが

ジョセフとシーザーの拳をまとい

そして、新たな合体技が炸裂した！

「行くぜ！ シーザー！」

「わかったぜ！ ジョジョ！」

「刻むぜ！ 波紋と超電磁砲のビート！」

「シーザー！ アレやるぜ！」

「あれか！ わかったぜ！」

「行くぜ！」

ジョセフとシーザーの波紋が、木原に炸裂した！

終わった…ついに戦いが終わったのだった！

木原はこの後 意識不明の重傷を負ってしまった！

体中のあらゆる機能を停止させるのだった…

「おつかれさま、助かりましたわ」

「やっと、終わったぜ…」 「戦いが終わったのだな…」

ファーストサンプルを解析して

ワクチンプログラムを完成させた木山春生

だが、完成させたばかりの物を作動させることにためらう

「大丈夫なの…絆理ちゃんがね、先生のことを信じているって」

「…」「ああ…信じてもらっているから」

「じゃあ、発動するよ…」 プログラムが成功した！

テレスティーナ木原を倒した後
アンチスキルに引導を引き渡した…

第二部 第七話 ヒーローたちの生還

戦いを終えた後

枝先絆里をはじめとする

子供たちが目を覚ました！

「あれ…？ 先生…？ 目元にクマが出来ているよ…？」

「先生…髪が伸びているけど…」

「先生だ…」「木山先生だ…」「お前たち…」

「衿衣ちゃん、私の声…聞こえる？」

助けてくれて、ありがとう…」

「今度こそ、言わせてくれ…ありがとう…」

子供たちを助けてくれて…」

「ああ！ 子供たちも無事でよかった…」

「一時はどうなるかと、思っていたぜ！」

「やっと、終わったんだな…」

後日 戦いを終えた後

病院の屋上には、子供たちがいた

「もうすぐかな？」「早く来ないかな？」

「衿衣ちゃん、初春さんたちは？」

「すぐに追いつくから、先に行ってきたって」

「それにしても、遅いなの…せつかくの記念日なのに…」

そして、残った皆も、病院に向かうのだった！

「早くしないと！間に合いませんよ！」

「御坂さんや白井さんが遅刻なんて、珍しいですね！」

「全く、お姉さまったら、今日に限って、寝坊するなんて！」

「うっさい！アンタなんて、ぐっすり寝ていたじゃない！」

「それにしても、御坂さんが、こんなアイデアを思いつくなんて！」

「何言っているの！御坂さんらしい」

「ロマンティックなアイデアじゃない！」

「そ、そんなんじゃないよ！」

黒子の電話が鳴った

(もしもし？ 固法さん？)

(例の人が目を覚めたそうで

これから、事情聴衆を取るつもりだそうだけど…

簡単には口を割ってもらえないみたい…)

(そうですの)

(ジョセフさんも、シーザーさんも、
病院で御坂さんたちと合流するそうよ！)

(ええ、そうですの…ありがとうございます…)

電話を切った

「それで？」

「まだまだ、全容解明には至りませんが
ジョセフさんも、シーザーさんも
病院に来てくれるそうですわよ？」

あつ！ こうしては、いられませんわ！ 急ぎませんと！」

「あつ、これって」「あつ、ああ！」

一方 病院では

「うわーっ！ 来たー！」「すごーい！」

8月9日 今日には木山春生の誕生日だったので
御坂美琴が企画した、サプライズとは

空に浮かんでいる、熱気球の画面に子供たちの姿が！

(せーのっ！ 木山せんせい！ お誕生日 おめでとう！)

(早く良くなつてよね！) (せんせい！ 待っているよ！)
(僕たちも頑張るから！)

(ありがとう！ 木山せんせい！ 大好きだよ！ えへっ！)

木山は涙を流した

(お前ら…こんなサプライズ初めてだ…感動したよ)

一方 ジョセフとシーザーは…

「それにしても、遅いね、美琴ちゃん…」

「ああ…もう、サプライズは始まっているのにな！」

「きつと、来てくれるぜ！」

それにしても、学園都市って、色々な事が起きるんだな…」

「そうだな…シーザー」

学園都市って、色々な事が起きるんだな…」

そして、ジョセフとシーザーは、

御坂美琴達に、別れを告げ、

ジョナサンとスピードワゴンの捜索に出ると

言っ、しばらく別れることになった。

妹達（シスターズ）編

第三部 第一話 白井黒子と空条承太郎

ジャッジメント一七七支部に

一人の男が、チンピラ達と交戦しているという、
通報が入った！

白井黒子は、急いで、現場に向かった！

すると、そこには、不良たちが、バタバタと
倒れているのだった

「なんなんですか？」

「うう、あつ、いましたわ！

貴方を、暴力行為で、拘束します！」

「…！」

一人の男が、アンチスキルに、捕まってしまう

一人の男は、尋問を受けていた。

「あんなに、暴れておいて、

一言も無しですか？」

「…」

一人の男は、目を逸らして、空を見ていた。

「やれやれだぜ…」

「それは、こっちのセリフですわ！

どうしてチンピラたちと！」

「それは、俺の勝手だ、

アイツらが、騒がしかったからだ」

「そ、それだけで？」

「ああ」

「全く…これじゃあ、始末書書くのも、

面倒なことになりますわ…」

「…」

「はあ…もう、いいですわ、アンチスキルに、

身柄を引き渡しますわ」

「…」

その男は、空条承太郎という、男らしく、17歳の高校二年生、学園都市にある、とある、公立の共学校に通っているそうだが、無口で、白井黒子の問いに、なかなか、答えてくれなかったようだ。

「何か言わないと、アンチスキルに！」

「やかましいっぞー！小娘！」

「アイツ等が悪いだけだ！」

この空条承太郎という男、

学園都市でよく問題騒ぎを起こし続けていたことが判明した。どうやら、筋金入りの不良のようだ。

白井黒子の尋問に、空条承太郎は、答えるのだった。

「俺はテメエらと、関わるほど、暇じゃねーんだ」

「と言われましても、私の職務を放棄する可能性がありますわ！」

その後、アンチスキルからの連絡があり、

この、空条承太郎を保護観察して欲しいと頼まれる…

「はあ…私の方こそ、やれやれですわ…」

と、黒子は疲れ気味のようだ。

「悪いが、テメエに、構っている余裕はねーんだ」

と、承太郎が帰ろうとしたが…

黒子は即座にレポートを使って、承太郎の前に阻んだ。

「いけませんわ！貴方は保護観察の対象者ですもの！」

大人しくしてくださいさらないかしら？」

「やれやれだぜ…」

「とりあえず、このまま、この支部に閉じ込める訳にも、

いきませんから、とりあえず、お名前を教えてくださいますか？」

「…空条承太郎だ」

「私は白井黒子ですわ、以後お見知りおきを」

「それで、俺は何をすればいい？」

「そうですね…保護観察といえど、

更生プログラムを施す内容になっていきますわ。

真面目にやっていたら、一週間で終わりますわ」

「やれやれだぜ…」

「それは、こっちのセリフですわ！

どうして、私が、こんな厳つい不良を相手にしないと…」

「やかましいぞ！オンナ！」

「私は、白井黒子ですわよ！」

こうして、黒子は承太郎の保護観察を一週間する事になった。

第三部 第二話 承太郎の保護観察の一日

こうして、始まった、空条承太郎の保護観察。

白井黒子の監視下に置かれた、空条承太郎は、嫌々と街でボランティア活動に励むことになったのだ。

「なんで、俺がこんなことをしねーと、いけねーんだ！」

「保護観察だから、仕方ありませんの。」

文句を言う暇があったら、任務を全うしてください」

「やれやれだぜ……」

承太郎は嫌そうに、

黒子の指示に従うのだった。

最初は、地域清掃だった。

「……」

「ちやんと、やって欲しいですわ」

「ごちやごちや、うるせーぞ、アマ」

「はあ……先が思いやられますわ……」

承太郎は、文句を言いながらも、

ゴミ拾いや、箒で掃除をしていた。

「やれやれだぜ……どーして、こんな目に……」

「文句を言わずに、しっかり、やりなさいな！」

「やかましいッ！小娘！」

オメーみてーな、アマは、気に入らねえんだ！」

と、承太郎が黒子に怒る。

「はあ……こっちが、やれやれですわ……」

と、黒子が愚痴をこぼす。

その後、ボランティア活動が終わり……

「さて、私達も、そろそろ、帰りましょう」

「……」

承太郎と黒子は、風紀委員一七七支部へと、帰っていった。

「さて、保護観察一日目は、これにて終了ですわ……
わたしたちの方が、やれやれ、って、感じですよ……」

と、承太郎はため息をした。

「ため息は、私の方がため息ですよ」

「オイ、オメエ、

いつまで、保護観察をし続けるつもりだ？」

「ざっと、後六日は、この状態が続きますわ」

「俺は、早くやりてえことがあるのに」

「やりたい事と、やるべき事は、また違いますわ！

全く、別々にして下さらないかしら？」

「…俺は帰る」

承太郎は、帰っていった。

すると、入れ違いに、佐天涙子と初春飾利が、

やって来た。

「お疲れ様！」

「お疲れ様ですよ」

「あれっ？さっきの人って……」

「空条承太郎さんですよ」

「えっと…白井さんが言っていた、

保護観察の方の……？」

「ええ、でも、何て言うか…ジョセフさんと、

似た雰囲気ですよ……」

「さっき、見かけましたけど、

厳ついって、感じで、なかなか、近寄れなかったですよ……」

「ジョースターさんや、ジョセフさんは、

割と気さくな方でしたね」

「似ていますわね」

「私も、そう思います」

「ジョースターさんも、ジョセフさんも、承太郎さんも、

背丈は、さほど、変わらない上、

顔立ちや雰囲気似ていますわね…」

「そうそう」

「ひよっとしたら、何か関係があるかも！」

「ジョセフさんは、ジョースターさんの事、

死んだ、おじいさん、そっくりだって、

言っていましたし…」

「謎が深まりますわね…」

と、三人は悩むのだった。